

ボランティアの集い2008 基調講演会

## 「地域を支えるボランティア活動」

1月25日(日) 午前10時～11時半  
福祉センター 講堂

講師 福祉ジャーナリスト 村田幸子氏  
元NHKレポーター、解説委員  
現在は、NHKラジオ第一「ラジオ深夜便: 老いを豊かに」を担当  
著作 : 「女の魅力は話し方できまる」 主婦と生活社  
「仕事を語る女たち」 上・下巻 かのう書房

### < A さんのノート >

#### 在宅福祉

「在宅福祉」とは家に居るだけではなく、「自宅＋地域」、「施設＋地域」、迎えてくれる優しい目があるを指して言う！村田氏の口から最初に出たこの言葉は、私にとって目からうろこでした。

公的介護保険は今、右下がりの状態。公的介護保険とは、介護のプロが介護労働を提供するもので、公平、平等、画一的.....あれも無い、これも無いのエコノミークラスの介護である。一人一人のニーズに応えるものではないし、「寂しいから話し相手になって欲しい」などなど十人十色の求めには対応できない。

その部分で地域住民の支えあいが必要になるのだが、結果として大きい地域差が出てくるのは当然の理である。

#### ノーマライゼーション

太い幹の枝や葉にそれぞれの花を咲かせるデンマーク方式(ノーマライゼーション)の紹介。障害のある人やらしにくさを抱えている人に個人の自助努力だけを求めるのではなく、どんな人も当たり前に住らせる環境を変えることをノーマライゼーションという。

「福祉」とは貧しい人や障害のある人に「してあげる、してもらう、」の上下関係ではなく、人間として対等な並びの関係である。

ボランティアに大事なこととして、「いろんな人に接してその人の実体を知り、その人の住らしにくさを支える人でありたい。「何もなくていいのよ」と排除するのではなく、共に生きる共生社会のことをノーマライゼーション社会という。

#### プロの住民

「行政＝やる人 住民＝物申す人」では目的は達成されない。住民は「物申す」だけではダメ。「解決の」に動き回る人、行動する人」こそが**プロの住民**である。NHK「ご近所のそこ力」で見たように、行政とプロの民が両輪となって解決出来た事は多い。ボランティア(自発性)を促すきっかけの1つとして「学ぶこと」がある。学ぶことで迷いが無くなれば、積極的に前に進めるようになるから。

継続性、柔軟性も大事な要素である。骨太の根をはるためには有償性やNPOを採用するのもよい。余り

公的介護は、公的介護のシステムであり、民間企業とは異なる仕組みで採用されている。公的介護のある人だけが参加するのではなく、誰もが参加できる仕組みも大事。いずれも基本はボランティア活動である。

## 江戸川区の事例

北野武氏の兄を学長とする2年生の総合人生大学を設立。4学部の中に介護福祉学科もある。1年目地域の施設について学び、2年目は実際のレポート活動をする。卒業生はミニデイサービス、空き店舗利用による相談所兼居場所作りを始めたり、地域内にあるモニュメントの清掃をするなどプロ住民としての活躍している。

定年後の人や子育てを卒業した女性達が、学び実践する中で、自信をつけ、仲間を増やし、自分を大きく豊かにしていく自己実現を計っている。「生きる甲斐がある人生」を送ろうではないか！

### 定年後の生き甲斐

定年後、生きる心棒が無くなった時の生き甲斐に3つある。

- 1、趣味の世界に生きる。
- 2、家族、友人、知人のために尽くす。
- 3、見知らぬ人のためにボランティア活動をする。

### 高齢化

高齢化45%の山口県トア町の元気なお年寄りが町を支えている例。話し相手、施設のおもつたため。事サービスの配達は手押し車をカタコト押しながら老人自身がやっている。

### 妻のボランティア定年

定年後の夫達よ、生活的自立をせよ！一人を楽しむことが出来る人になれ！ボランティアに参加して、未との遭遇を楽しもうではないか！夫の定年が妻のボランティア定年にならないために！  
一歩前を出る。そして向き合う。乗り越える。それが出来た時、自分という器が大きくなる。可能性は無限あり、刺激的な人生になる。自分への挑戦、生き生き人生。思い出は回想するものではなく、一生作り続けていくものだから。

## < B さんのノート >

私の体には、人工の股関節が入っています。永く立っていることが困難なので、座って話をします。股関節と大腸がんの手術で、4回の入退院を繰り返した。「一病息災」という言葉があるが、私の場合は、「多病息災」である。なんとか定年までNHKで働かせてもらって、幸せだった。

豊田市と聞いた時に、世界のトヨタだから、高層ビルが立ち並ぶ町を想像していたが、そうではなかった。田園が残る静かな町という印象だった。障害者の立場で、この福祉センターをみると、全然ノーフリーになっていない。

今 国は、在宅福祉を進めようとしている。以前は、町から離れたところに、施設が建設され、遠い所に隔離されるやり方だったが、方向転換された。在宅の意味は、自宅だけではない。自宅に加えて、地域も協力して支える、という広い意味を持っている。さらに、気持ちを表現すれば、「迎えてく優しい眼があるところ」と言える。施設福祉でも同じことで、施設と地域の両方が協力し、優しい眼で見守るようにしようとする政策に変わってきている。

公的介護は、その特徴が、公平と平等そして画一的です。ある人が言ったが、エコノミークラスを偽証するという考え方です。人間が10人いれば、それぞれ違った環境にあり、10人十色の願いを持つ

誰かがサポートしてくれる。人間がサポートするのは、それがその人にとっての環境にのみ、その人がサポートできる範囲までです。その各々には、介護保険は各人それぞれの希望には答えてくれません。

介護制度は、介護労働をプロフェッショナルに任せるということです。心のケア、話したいということなどには対応してくれません。話し相手等は、地域で何とかしなければなりません。介護制度は、フォーマルな部分を受け持ち、地域がインフォーマルな部分をカバーすることになる。太い幹は行政が当し、枝葉は地域が受け持つ。枝には色々な花が咲きます。

こうした仕組みを表現するキーワードは、“住民参加”である。公的制度だけでは不十分で、住民の参加が不可欠である。住民が参加すると良いことがある。それはノーマライゼーションという概念が普及することです。ノーマライゼーションはデンマークで生まれた概念です。障害者の子供を持つ親たちが気付いて提案し、世界に広がった。

他人の手を借りる時には、「してあげる」と「してもらう」という二つの立場が発生する。日本では、健常者が「何かをしてあげる」という考えで進められ、隔離と保護が中心に据えられてきた。その結果として、町には健康な人だけが暮らしている。外国から訪れた人に、「日本は障害者の人が居ないね」と言われたことがある。健常な人は、日ごろ接触していないから、障害者の本音が聞けない、分からない。接触がないから、誤解を生み、それは偏見そして差別につながる。対等な関係を築くにどうしたらよいだろうか。健常者を含めた住民の皆が動き回ると良い、すると色々な障害者と出会い、彼らの困難や本音を知ることができる、肌で感じるすることができる。やさしい目を、受け入れる心持てるようになる。

983年に、初めての股関節の手術をした。NHKのレポーターをしていた時だった。半年間入院して職場に戻った。職場仲間がやさしい言葉を掛けてくれた。ありがたいと思ったが、1週間もすると居まいが悪くなった。その言葉は「あなたは何もなくてもよい。私たちが代わりにするから」という内容だった。障害者になったから、対等の仲間ではなくなった、と告げられたように取った。仲間や友人悪気があって言っていたわけではない。しかし排除の論理だった。日本の障害者に対する社会の取り扱いを、身をもって体験した。

その時に私が望んだ言葉は、「あなたは、この部分ができるが、この部分が少し足りないの、それだけお手伝いしますね」。そうすれば、私は対等の仲間として卑屈になることなく仕事に戻れることできたであろう。あれから20年余が経過して、今は社会も変化し、共生社会に変わってきた。

“プロの住民”になることを提案している。地域の課題を見つけた解決しようと努力する人です。自らが培ってきた能力を地域に身に還元しようと努力する人です。何もしない人がいる。そして批判する人や物申す人はたくさんいます。物を申すのも結構です。それだけでなく、行動する人に育ちましょう。そしてそういう人をできるだけ沢山作りましょう。そうすると良い社会になります。では、どうやらそういう人を作ることができるかということが問題になります。沢山の人を引きこむには仕掛けがあります。私がおの中心は“学ぶ”ということだと思えます。学ぶことから自発性が表われてきます

有償ボランティアとか無償ボランティアという言葉があります。また NPO という新しい言葉もありわかったような、しかし釈然としないまま、活動を続けています。私は有償ボランティアは、継続性確保できる点で大切なことだと思っています。持ち出す一方でなく、交通費など発生した費用くらい支払うとか、そうした仕組みができれば、長続きするでしょう。お金にあまり余裕がない人も参加できます。ボランティアは、最初は自信がない状態でスタートしますが、少し続けていると自信がつき、継続できるようになります。

“プロの住民”を育てる点で、良い活動をしている例として、東京の江戸川区があります。江戸川区は、ボランティア養成のための2年制大学があります。江戸川総合人生大学です。学長は、北野誠んで、私は介護・福祉学部長に任命されています。授業料は、3万円／年です。1年生は、基礎講

で、知識を得ます。2年目は実践講座で、医者でいうインターンのように現場で研修します。新入生時は、うつむき加減で、ぼそぼそ言っていた人たちが、1年も経つと、大きな声で話すようになります。既に3回生が卒業しました。OBの活動事例ですが、「モニュメントシックス」という名前のグループがあります。江戸川区にあるモニュメントを清掃する活動を行っています。バケツを持ってモニュメント掃除して回っています。包丁を研いで上げるグループもあります。

こうしたボランティア活動に参加すると新しい仲間ができます。達成感が得られます。学び、実践することで、自分はこの生き方で良いのだという自信が付き、自分を豊かにすることができます。自分と器を大きくする、自己実現を実感できます。

働いていた人は、その時には、自分の心棒を持っていました。仕事をやめると、その心棒がなくなり一人で地域に戻ってゆきます。みずから生きがいを見つけなければなりません。

3つのカテゴリがあります。①は趣味の世界です。私の母は91歳です。俳句が趣味で今も月に1回の吟行に参加しています。②は友人や知人から喜ばれる活動です。私の友人は孫娘のために弁当を作っています。これが彼女のやりがいです。③は、見知らぬ人・地域のために役立つことです。

③に関連して印象に残っている地域があります。山口県の東和町です。私はこの町に半年間、取組に行くことになりました。この町は当時すでに高齢化率が46%でした。高齢社会を迎えようとして日本の先頭を行っている町だったからです。私はお年寄りがひっそり暮らしている姿を思い浮かべこの町を訪れました。ところが皆さん実に元気でした。

例えば配食サービスです。社会福祉協議会が行っていましたが、末端の配達を、お年寄りの人がしていました。骨粗鬆症を患っているけど、歩くことができる人が、シルバーカーに、3つ、4つの弁を乗せて、近所に配ります。手渡す時に一言、二言の言葉を交わします。「自分がやらなくっちゃ」、いう責任感、「役に立っているという自覚」がその人を元気にしていました。WHOによると健康の定義は、①身体的、②精神的、③社会との調和だそうです。社会との関わりが、身体的にも、精神的にもその人を健康にするのです。インタビューに応じた町長さんは「わが町の自慢は老人です」と答えました。財政的には苦しいその町では、箱物は皆無です。それでも皆さんが生き生きと暮らしていました。

ボランティアで活躍している女性の悩みを聞きます。夫が定年退職した妻たちです。以前は、仲間多くいて、「昨日はボランティア、今日はおしゃべり、明日はお食事など」我が世の春を謳歌していました。しかし、今は出かけようとする、夫が「どこへ行く、何時に帰る、昼飯はどうなる」など色々聞かれて出にくくなる。夫の定年退職は、妻のボランティア退職となってしまいます。男は生活的な自立できていません。御飯が用意できない、洗濯ができない。妻がいないと困る。その上、思っている動に移せない人が多いのです。周りの人から「あいつはでしゃばりだ」と言われることを恐れます。の中でうつうつと過ごすこととなります。アンケート調査をすると、8割の人が社会的な活動をしたと答えるけれど、実際に行動する人は1割だそうです。こうした潜在する活動家を顕在化する仕掛けが要ります。

私を励ましてくれた言葉に「未知との遭遇」があります。初めての股関節の手術を受けることになりました。「歩けるようになるかしら、仕事に戻れるかしら、なぜ私だけがこんな目に合うのか」など不安なり、愚痴ばかり言っていました。どん底に沈んだ状態で、さあ明日が手術だという前日に、部屋をてゆく看護師さんが「明日は未知との遭遇です。楽しみじゃない」と言いました。私はその瞬間は、なことを言う人だと思いましたが、そのうちの自分の心にしみこんできました。もうすでに相当期間付き合いのあった看護師さんは、私の性格を見抜き、並の言葉では元気づけられないと判断して、意外性のある言葉をかけたのでしょう。この一言が私を変えました。手術に立ち向かう気になりました。その後、3週間の石膏での拘束、身体機能の低下、半年間のリハビリが続きました。その間頑張ったのは、この一言でした。

高齢になって前向きな気持ちを失う最大の敵は「自分はここまでだ」と自分の可能性を見限る気持だだと思います。自分の器を大きくする、自分の人生を刺激的にする気持ちを持ち続けましょう。回想法という認知症療法があります。思い出を語ることを繰り返す治療法です。私たちは、過去の思い出を語ると共に、それと同時に新しい思い出をどんどん作ってゆきましょう。一生涯作り続けましょう。

## [講演会表紙に戻る](#)

